

はじめに

文部科学省オープンリサーチセンター整備事業： 「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究」

望月 昭

(研究代表：立命館大学人間科学研究所 所長)

オープンリサーチセンター整備事業「臨床人間科学の構築—対人援助のための人間環境研究」は、2005年度に文部科学省による採択を受け、向こう5年間、人間ひとりひとりの潜勢力（ポテンシャル）を最大化するための「対人援助学」の創造をめざすプロジェクトです。そして、このプロジェクトの運営組織を「ヒューマンサービス・リサーチセンター（HSRC）」と名づけ、立命館大学人間科学研究所内に設けることとなりました。これをメイン・エンジンとして、当事者組織、援助サービス提供者、援助専門職者の有機的「連携」を展開し人材養成と教育の新しい仕組みを構築し、その作業を通じて、「対人援助学」（Science of Human Services）と呼ぶことのできる新しい「融合的」学範（ディシプリン）の構築を目指していきます。

この事業は、2004年度まで行われてきた学術フロンティア推進事業「対人援助のための人間環境デザイン」を発展的に踏襲するものです。学術フロンティア推進事業では、社会環境とコミュニケーションの障害性を縮減するという統一した視点から、具体的で直接的援助場面における事例研究を重ねつつ、教育や福祉などの現場における臨床への応用、そして環境の再構造化へと、対人援助の作業を一つのスペクトラムの中に位置づけて研究・実践が行われました。

新しい「ヒューマンサービス・リサーチセンター」（HSRC）では、上記したような研究的・実践的な知の蓄積、またそこで生まれた人的ネットワークの上に、対人援助についての実践と研究のさらなる質的な発展を図ろうとしております。その方向性としては、オープンという名にふさわしく、海外の研究者や組織との連携、さらに大学院・学部教学との有機的連携、基礎領域と応用領域との連携、そして地域資源としての大学というセクターの新しい機能の追求を挙げることができま

す。海外との連携に関しては、アジア諸国との連携や情報交換も積極的にすすめ、共同研究や国際的な実践を展開していく予定です。手始めとして、対人援助（Human Services）の研究と実践のあり方に関する現状や当プロジェクトへの提言を、国内外の研究者や実践者から募りこれを公開するFour at the Cornerをサイト内に立ち上げ専用サイトに連載の形で公開しております（これは、立命館大学の「2005年新領域創造センター新拠点プログラム」の援助によります）。

大学院・学部の教育との有機的連携としては、単に学生が、対人援助現場においてこれを補佐し現場を知るといった従来のインターンシップ的な関係にとどまらず、より積極的に、学生（あるいは大学）がゆえに可能な対人援助のあり方を発見的な形で学生教育の中に取り込んでいくという実践的（実験的）態度で臨みたいと考えております。さらに、対人援助にかかわる社会的行動の発生や獲得に関するプロセスについて、社会に開かれた実践的活動を通じて、新たな基礎的研究の枠組

みについても創造的に構築したいと考えています。

このようにして、現実社会に開かれた「地域資源」としての大学のあり方を改めて実践的に検討し、またそれを基礎的研究に還元しつつ、まったく新しい学範としての「対人援助学」を、他ならぬこの立命館大学から世界に向けて発信していきたいと考えています。

対人援助すなわち「他者をたすける」という行為は、「うばう」「あらそう」などと同様、人類の発生以来あまねく地球上で行われてきたものと思われまます。そして、近代以降、科学の名のもとにこの「たすける」という行為に関わる様々な学範（ディシプリン）が勃興し今日に至っていることも論をまたないでしょう。人は労働に伴う苦痛から機器や技術の発明によって助けられ、また疫病や疾病からも医学や工学の発展により解放されつつあります。一方、人が人を動かし動かされる社会的行為において、そのような進歩があったかと言えば多に疑問です。こうしている今も、世界中で「うばう」「あらそう」すなわち「罰的」な操作によって人を動かす行為は枚挙に暇がありません（Skinner, 1990, 「罰なき社会」行動分析学研究, 5(2), 参照）。

「対人援助＝ヒューマンサービス」は、一種の職業的行為を示すものと位置づけられてきました。従来、それらは相手を「知る」「計る」ことを精緻に行う「認識の科学」の単なる応用、あるいは極端な場合には科学の対象とはならないものと考えられる傾向もありました。しかし、医学や工学の基礎となるような「知る」「計る」といった「認識の科学」と、「たすける」という「実践の科学」とでは、実は距離のあるものであることが次第に明確になってきたといえるでしょう。実践的な立場から端的に言えば、「知る」ことは必ずしも「たすける」にはつながらないということです。また、類似の実践的内容を持つ「教える」「治す」といった行為が、「たすける」の主要な内容としてとらえられる時期もありました。しかし、それらは、油断するとすぐに「うばう」「あらそう」にすり替わりその手段となってしまいます。

「たすける」という実践的行為について改めて考え直す時期がきていると思います。「教える、なおす」とも、そしてもちろん「知る、計る」とも異なる、人が相互に共生するための社会的関係そのものを対象とし、その社会的関係の成立と維持を実現するための仕組みを探求する必要があります。その探求は、狭い職業的技法としてのみでなく、社会のありようそのものにも言及していくこととなります。「対人援助学」のめざす最終的ミッションはそのようなものであると考えています。

当特集は、ヒューマンサービス・リサーチセンターの枠組みのもとで、2006年度までに行われた研究の一部を紹介するものです。「対人援助」に関わる、動物実験から地域研究までの幅広い領域を網羅したものです。新たなアイデアやご批判などを賜れば幸いです。